

長岡京市文化財調査報告書

第 66 冊

2014

長岡京市教育委員会

編集 公益財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター



(1) 勝龍寺城北東の南西部土塁・空堀残存状況（北東から）



(2) 土塁構築面からの掘り込み SD02（東から）

井ノ内車塚古墳第6次（長岡京跡右京第1068次）調査



(1) 調査前墳丘の状況（北西から）



(2) 2トレンチ埴輪出土状況（西から）

序 文

私たちの長岡市は、豊かな水と緑に恵まれた良好な環境と大都市を結ぶ交通の利便性により発展してきたまちです。

古くは旧石器時代から人々が生活を営んだことがわかつており、特に8世紀後半には、「長岡京」という当時のわが国の都が置かれた地として全国的に知られています。また、市内には恵解山古墳をはじめとした首長墓や、勝龍寺城などの城館跡、乙訓寺・長岡天満宮といった神社仏閣など、数多くの文化遺産が点在し、現代に至るまで豊かな歴史と文化を守り育んできました。

しかし、こうした遺跡は、まちの発展の一方でかつての姿が失われつつあります。本市では、これらの遺跡の調査・保護に力を入れるとともに普及・啓発に努め、地域全体で風土や文化遺産を守るまちづくりを進めています。特に平成23年度から国史跡恵解山古墳の保存・整備に尽力し、今秋には、史跡公園として開園する予定です。

さて、本報告書は、平成25年度に長岡市教育委員会が実施した東神足地区・井ノ内地区・下海印寺地区における発掘調査の成果をまとめたものです。調査は長岡京の全容解明を目的として実施したものですが、あわせて東神足地区では勝龍寺城の土壘・空堀跡の構造解明、井ノ内地区では乙訓地方の首長墓系譜を考えるうえで重要な井ノ内車塚古墳の規模や形状の把握、下海印寺地区では纏文時代中・後期の伊賀寺遺跡縁辺の状況確認を行いました。

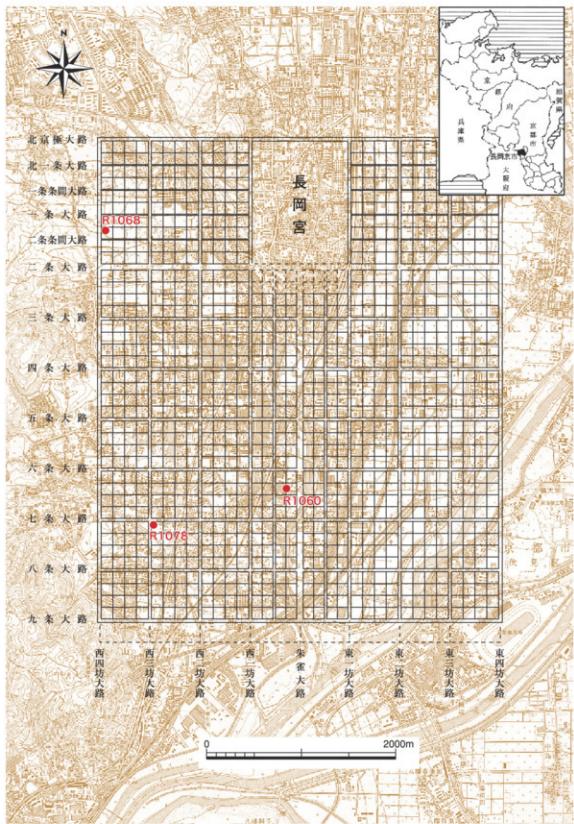
最後になりましたが、発掘調査にあたり数々のご助力をいただきました土地所有者や地元協力者の方々、ご指導・ご助言をいただいた諸先生方並びに調査を担当していただいた公益財団法人長岡市埋蔵文化財センターなどの関係機関に深く感謝いたします。

本書が文化財の普及・啓発の一助となり、また地域学習の資料として広く活用いただければ幸いです。

平成26年3月

長岡市教育委員会

教育長 山本 和紀



第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)

凡例

1. 本書は、長岡京市教育委員会が平成25年度に国庫補助事業として公益財團法人長岡京市埋蔵文化財センターに事業を委託して実施した発掘調査に関する概要報告である。
2. 調査対象地は、第1図および付表-1に表示した。
3. 長岡京跡の調査次数は、右京域と左京域に分け一括算したものである。また、調査地区名は、前半が奈良文化研究所の遺跡分類表示、後半が京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』(1977年) 収録の旧大字小字名による地区割りと同地区内における調査回数を示す。
4. 長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号(1992年) の復元案に従った。
5. 本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一(1991年) によった。
6. 本文の(注)に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集(1985年) に従って略記した。
7. 本書において使用している遺構番号は、長岡京跡に関する調査の場合、調査次数+番号であるが、煩雑さを避けるため、調査次数を省略している。「SD01」の場合、調査次数を冠した「SD ○○○ 01」が正式な番号である。
8. 本書で使用している方位と国土座標値は、旧座標系の第VI系によっている。
9. 本書の挿図の土層名で〈〉を付けて表示した記号は、『新版標準土色帳』(1997年版) のJIS表記法による土色名である。
10. 本書の執筆は、各章のはじめに氏名を記し、編集は公益財團法人長岡京市埋蔵文化財センターの山本卯雄が行った。

付表-1 本書報告調査地一覧表

調査次数	地区名	所在地	現地調査期間	調査面積	備考
長岡京跡右京 第1060次	7ANMKI-9	長岡京市東神尾二丁目地内	2013年6月17日 ～ 2013年8月13日	48m ²	勝龍寺城跡 神尼城跡 神尼遺跡
井ノ内車塚古墳 第6次 長岡京跡右京 第1068次	7ANGKT-7	長岡京市井ノ内向井芝4	2013年8月7日 ～ 2013年10月2日	63m ²	井ノ内車塚古墳
長岡京跡右京 第1078次	7ANOOD-14	長岡京市下海印寺下内田13-1	2013年12月9日 ～ 2014年1月25日	98m ²	伊賀寺遺跡

本文目次

第1章 長岡京跡右京第1060次(7ANMKI-9地区)調査概要

1はじめ	1
2調査経過	2
3検出遺構	3
4まとめ	6

第2章 井ノ内車塚古墳第6次調査概要

—長岡京跡右京第1068次(7ANGKT-7地区)—

1はじめ	11
2調査経過	12
3検出遺構	14
4出土遺物	18
5まとめ	20

第3章 長岡京跡右京第1078次(7ANOOD-14地区)調査概要

1はじめ	21
2調査経過	22
3検出遺構	22
4まとめ	24

卷頭図版

卷頭図版1 (1) 勝龍寺城北東の南西部土壙・空塼残存状況(北東から)
 (2) 土壙構築面からの掘り込みSD02(東から)

卷頭図版2 (1) 調査前埴丘の状況(北西から)
 (2) 2トレンチ埴輪出土状況(西から)

図版目次

中世勝龍寺城(長岡京跡右京第1060次)調査

図版1 (1) 調査区北辺調査前風景(北西から)	(2) 南北土壙北崖面調査区(北西から)
図版2 (1) 西・中央調査区全景(東から)	(2) 西調査区東端北壁面の東西空塼堆積状況 (南から)
図版3 (1) 南北土壙構築以前の堀り込みSD02	(2) 中央調査区中央部東西空塼堆積土層 (東から)
	(南東から)

図版4 (1) 中央調査区北端平坦面堆積層(東から)	(2) 中央調査区南端東西土壙構築土層 (東から)
----------------------------	------------------------------

図版5 (1) 東調査区土橋構築土層(西から)	(2) 調査後の土壙保護対策風景(北東から)
-------------------------	------------------------

井ノ内車塚古墳第6次調査(長岡京跡右京第1068次)

図版6 (1) 調査区全景(北から)	(2) 調査区全景(南から)
図版7 (1) 1トレンチ全景(北から)	(2) 1トレンチ全景(南から)
	(3) 1トレンチ盛土堆積状況(南西から)

図版8 (1) 2トレンチ全景(南から)	(2) 2トレンチ全景(西から)
----------------------	------------------

図版9 (1) 造り出し又は墓道全景(南東から)	(2) 造り出し又は墓道全景(東から)
	(3) 造り出し又は墓道全景(西から)

図版10 (1) 墳輪出土状況(北から)	(2) 墳輪出土状況(西から)
----------------------	-----------------

伊賀寺遺跡(長岡京跡右京第1078次)調査

図版11 (1) 調査区遠景(北西から)	(2) 調査区遠景(南から)
図版12 (1) 飛鳥～奈良時代の遺構群全景	(2) 飛鳥～奈良時代の遺構群(東から)
	(西から)

図版13 (1) 据立柱建物SB03(南東から)	(2) 据立柱建物SB04(南西から)
--------------------------	---------------------

図版14 (1) 小穴P3須恵器B出土状況(北から)	(2) 落ち込みSX01・満SD05検出状況 (南東から)
図版15 (1) 落ち込みSX01・満SD05完掘状況	(2) 落ち込みSX01繩文土器出土状況 (南西から)
	(北東から)

付表目次

付表-1 本書報告調査地一覧表	iii
付表-2 報告書抄録	26

挿 図 目 次

第 1 図 長岡京と調査地の位置 (1/40,000)	ii
長岡京跡右京第 1060 次調査	
第 2 図 発掘調査位置図 (1/5,000)	1
第 3 図 中世勝龍寺城北東区画南西部付近の調査位置図 (1/500)	2
第 4 図 北東区画西辺南北土界北崖岸土層図、西調査区平面図・土層図 (1/80)	7・8
第 5 図 中央調査区、東調査区平面図・土層図 (1/80)	9・10
井ノ内車塚古墳第 6 次調査（長岡京跡右京第 1068 次調査）	
第 6 図 発掘調査位置図 (1/5000)	12
第 7 図 墳丘と調査区配置図 (1/400)	13
第 8 図 第 6 次調査平面図 (1/100)	14
第 9 図 1 トレンチ土層図 (1/50)	15・16
第 10 図 2 トレンチ平面図 (1/50)	17
第 11 図 2 トレンチ土層図 (1/50)	19
第 12 図 墳丘と調査全体図 (1/250)	
長岡京跡右京第 1078 次調査	
第 13 図 発掘調査位置図 (1/5,000)	21
第 14 図 調査区検出遺構図・土層図 (1/150)	22
第 15 図 掘立柱建物 SB03 実測図 (1/100)	23
第 16 図 掘立柱建物 SB04 実測図 (1/100)	23
第 17 図 土坑 SK02 実測図 (1/10)	24
第 18 図 小穴状遺構 P45 実測図 (1/10)	24
第 19 図 縄文時代中期の遺構平面図 (1/100)	25
第 20 図 浅い落ち込み SX01 遺物出土状況 (1/20)	

第 1 章 長岡京跡右京第 1060 次 (7ANMKI - 9 地区) 調査概要 —長岡京跡右京七条一坊二町、神足遺跡・中世勝龍寺城跡・神足城跡—

1 はじめに

- 1 本報告は、2013 年 6 月 17 日から 8 月 13 日まで、長岡京市東神足二丁目地内において実施した中世勝龍寺城跡（北東外郭施設の土壙・空堀・土橋）、長岡京跡・神足遺跡に関する調査概要である。
- 2 当調査は、神足公園整備に伴い、中世勝龍寺城跡の残存遺構を活かして整備する目的で実施したものである。調査面積は、約 48m² であった。
- 3 調査地は、長岡京跡右京七条一坊二町の推定地や、旧石器～鎌倉時代の神足遺跡にも重複しているため、これらに関わる範囲確認調査としての目的も兼ねていた。
- 4 発掘調査は、平成 25 年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会から委託を受けた公益財團法人長岡市埋蔵文化財センターが実施し、現地調査は同センター山本輝雄と長岡京市教育委員会教育部生涯学習課文化財係岩崎誠が担当した。
- 5 発掘調査に当たっては、地元自治会、近隣住民、神足神社、神足公園利用者に深いご理解と種々のご協力をいただいた。
- 6 本報告は、岩崎が執筆し、編集は山本が行った。



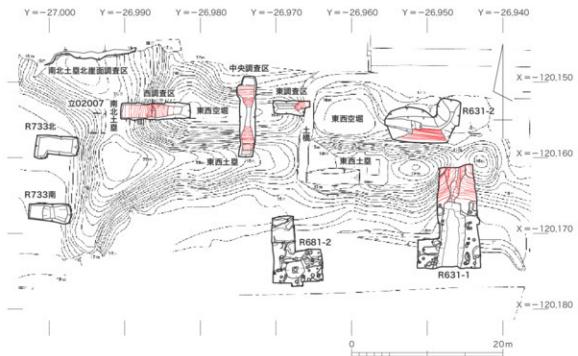
第 2 図 発掘調査位置図 (1/5,000)

2 調査経過

当調査地は、JR 長岡京駅の南約 400 m に位置する。調査地の南西約 100 m の位置には、勝龍寺城主郭が所在する（第2図、図版一上）。北には隣接して神足公園があり、北東には式内社神足神社が鎮座する。南は緩やかに下る地形で、低位段丘 I から II へ移行する。調査地の現状は、密生乱立した孟宗竹林で、この竹藪内には土塁や空堀と空堀を渡る土橋が、明晰な起伏として残っている。これらの構造物は、その配置関係から中世城館の防衛機能をもつ横矢構造の施設と位置付けられ、勝龍寺城の北東外郭施設の一部と考えられている。このような残存遺構群は、細川藤孝が元亀 2（1571）年に勝龍寺城を改築した時に築いたとされている。当所に残る土塁と空堀は、途切れながらも神足神社や神足公園などを囲むような配置にある。その規模は、東西約 130 m、南北約 80 m の長方形に近い形状である。ここでは、この区画を勝龍寺城北東区画と呼ぶ。

今回の神足公園整備範囲は、勝龍寺城北東区画の南西部に残る土塁空堀遺存地形をほぼ覆い、同区画南辺空堀を渡る土橋が、ほぼ中央に位置する。当調査は、土橋所在位置より西側に重点を置いた。調査範囲の西側にある北東区画西側の南北土塁北端は、神足神社への西からの進入路により削平を受け、崖面になっている。また、同南北土塁の南部には、北東区画の南辺となる東西土塁が取り付くとともに、その取り付き位置から南に南北土塁中軸線を南西方向に変えてさらに南へ伸びる。北東区画南辺となる東西土塁の北辺には東西空堀が伴う。この空堀の西端は北東区画西側の南北土塁に沿って北に折れ曲がる。

当調査地付近は、1979 年から 1980 年に京都考古学研究会が踏査し、精密な地形測量が行われ、土塁と空堀および土橋の残存状況が実測図で具体的に示されるとともに、勝龍寺城の縛張りに関する記述がある（第2図、図版二上）。



第3図 勝龍寺城北東区画南西部付近の調査位置図 (1/500)

する検討が急速に進展した。その後、細川勝龍寺城縛張り想定範囲内の調査が増え、部分的な内容が把握されてきた。⁽¹⁾

今回の調査は、勝龍寺城北東区画南辺が、北接する神足公園に取り込まれて整備されるのに伴い、遺跡の保存と活用を視野に入れた整備を行う上で必要なデータを得ることを主な目的として実施した。そこで、勝龍寺城関連施設と考えられる遺構群の具体的な規模や構造を明らかにするため、4か所に調査区を設定した（第3図）。その一つは、対象西辺にある南北土塁の北端崖面で断面観察を行った。この調査区を南北土塁北崖面調査区とした（図版一下）。2か所目は、同南北土塁のほぼ中央部東斜面に調査区を設け、西調査区とした（図版二上）。3か所目は、東西空堀を横断する方向に勝龍寺城北東区画南辺の東西土塁北斜面から同区画平坦地にかけての調査区を設け、中央調査区とした（図版二上）。4か所目は、東西空堀を横断する土橋推定施設の西側面に調査区を設け、東調査区とした（図版五上）。

（1）南北土塁北崖面調査区

3 検出遺構

当調査区（第4図左）は、勝龍寺城北東区画西辺にある南北方向土塁の北端崖面であり、土塁の構造を考察する目的がある。土塁構築盛土は、土質の特徴から、黄色系と黒色系の互層からなる下層（同土層図第12～16層）と、細分が困難な疊層からなる上層（同図第2～11層）の2層に大きく分けることが出来る。この違いは、一時期の土塁構築における時間的な差とする見方がある。また、この上層は、西調査区で検出した土塁構築以前の掘り込み SD02 を埋めた上層の土質と極めて類似している（同図右西調査区土塁側面図第2・3層）ことから、構築時期の違いとも考えられる。すなわち、下層の土塁構築盛土からなる低い土塁が構築された後、何らかの都合で上層が盛土されて現在に残る規模と形状に変更されたと類推する考え方である。その根拠は、東西土塁に關係する過去の調査との比較による。構築時期は、出土遺物がないため明確でない。このような上・下層からなる土塁の残存高は、周辺部で検出した土塁構築面から約 5 m を測る。現状の当土塁の高さは、現存土塁頂部付近の表土の厚さが 10 cm 以下しかないことから、本来の高さより幾分かは低くなっていると察せられる。

<土塁構築盛土上層>

第2～11 層は、土質と土色の特徴から、当所周辺の基盤層になっているにぶい黄橙色の低位段丘疊層を掘削し、土塁として盛土した土層と考えられる。この土塁構築土は、土塁構築盛土下層の上を覆うように、東斜面を中心に、厚さ約 1 m 盛られ、西側には厚さ約 10～20 cm の積み重ねが観察できた。西側の薄い積み重なりからなる土層（第8～10層）は、この南北土塁の東に平行して掘られた空堀の掘削土を、土塁構築盛土下層からなる土塁上に撒きあげ、土塁西傾斜面に撒き落とされたことに起因しているものと考えられる。

<土塁構築盛土下層>

黄橙色土と黒色土が互層に盛られている（第2～11層）。上層に比べて堅く締まった盛土で、

礫や小石をあまり含まない。互層に盛られた土層観察から、東側に並走する南北空堀側から築き始めていることがわかる。黒色土は、土壙構築面の表土層に酷似し、黄橙色土は、低位段丘を覆う土層に近いことや、砂礫をあまり含まないことから、この土層を当土壙の東に沿う空堀の掘削土とした場合、その空堀の掘削深度は1.5m前後と考えられる。構築された高さは、周辺部の土壙構築面標高から換算して、約4mと考えられる。

(2) 西調査区

当調査区（第4図右）は、今回の調査範囲の西邊にある南北土壙のほぼ中央部東斜面に設定した。当調査区東端は、調査範囲内所在の東西空堀の西端である。

〈南北土壙〉

当調査区内の南北土壙は、土壙構築基盤層の段丘疊層上面から高さ約3.5mの盛土で構築されている。東西空堀の底から当調査区南北土壙頂部までの比高は、約6.5mである。斜面傾斜角は、約45度の急斜面である。この土壙は、当調査区から北約5m地点（北岸面調査区付近）で最も高くなってしまい、土壙構築基盤層上面からの高さは、約5mを測る。また、当調査区から南約5mの東西土壙が取り付く地点では、土壙構築基盤層上面からの高さは、約4.5mである。このように、当調査区は、残存する南北土壙の最も低まった部分の東斜面にあたる。

南北土壙構築土は、次に記す掘り込みSD02の埋め土と考えられる下層と、その上に厚く盛られた上層に分けることが出来る。下層は、礫の少ない砂質土からなる（同図の南北土壙図第26～29層、同土壙側面図第4～7層）。この下層を細分層した土層のあり方から、掘り込みSD02は、一気に埋め戻されたと考えられる。南北土壙北岸面で観察した土壙構築盛土下層の在り方は全く異なる。上層は、その土質や土色などの特徴から、段丘疊層を掘削して厚く盛られたものと推察され、南北土壙北岸面で観察した土壙構築盛土上層の疊層に酷似している。掘り込みSD02を埋め、南北土壙を築いた時期は、出土遺物がないため時期の確定は困難であるが、勝龍寺城史の大好きな画期点と言える細川藤孝改築期が有力な候補と言える。

〈掘り込みSD02〉

当調査区では、南北土壙構築以前に段丘疊層よりも掘り下げられた掘り込みSD02を検出した（同図三上）。この掘り込みは、深さは約2mを測る。検出範囲は掘り込みのおよそ北半分と思われるが、断面形状は逆台形と考えられる。この掘り込みSD02は、平成17年度立会02007次調査検出の溝と繋がり、南北土壙上層構築以前の東西方向空堀と考えられる（第3図）。南北土壙頂部の低まりは、この土壙上層構築以前の空堀推定位置と重なることから、南北土壙上層構築以前の空堀を埋めたことに起因しているものと考えられる。

掘り込みSD02を南北土壙上層構築以前の東西方向の空堀と考えると、北東区画南辺土壙北辺に今も残る空堀SD01の前身と考えられる。このことから、北東区画南辺土壙北辺に現存する東西空堀SD01は、北東区画西辺南北土壙を築く際に、深く掘り直された可能性がある。

〈空堀 SD01〉

当調査区東端部は、東西空堀の西端部である。この南北土壙東側の空堀堆積（同図の北壁土層

図第4～7層、南北土壙図第11～23層、同版二下）は、堀底まで近世～近代の遺物を含み、16世紀代の遺物は2点だけであった。空堀の深さは約3.5mあり、掘り込みSD02の深さより約2m深いことから、西辺の南北土壙上層構築時に掘り足されたと考えられる。

(3) 中央調査区

土橋から西辺土壙までのほぼ中央に設定した調査区で、東西土壙頂部から東西空堀を横断して北平坦面までを貫くように南北方向に設定した（第5図左）。ここでは、空堀SD01の幅と深さ、東西土壙構築盛土の構築状況、北平坦面の土壙構築盛土の有無などを調べる目的がある。

〈空堀 SD01〉

空堀SD01（同版三下）は、土壙構築面になる旧表土（同図土壙側面図第8層、西壁土壙図第23層）から段丘疊層（同図土壙側面図第9層以下、西壁土壙図第24層以下）を掘り込んで作られている。規模は、幅約7.5m、深さ約3.5mを測る。空堀堆積層（同図西壁土壙図第5～16層）は、近世以降の堆積だけで、構築時期を示す遺物は出土しなかった。空堀の北斜面は、約50度の傾斜がある。空堀の底は、西調査区の空堀の底とはほぼ同じ標高で、ほぼ水平に掘られている。断面形状は、逆台形で、箱型状を呈す。

〈土壙〉

当調査区南端にある東西土壙には、厚さ約1mの土壙構築盛土が残っていた（同版四下）。土壙構築土は、土壙構築面の表土層と思われる黒色土の上に第5・6層（同図土壙側面図第2～7層、西壁土壙図第17～22層）が確認できた。この高さは、土壙構築土がかなり崩落した状態と考えられる。土壙構築盛土からは、14世紀の瓦器碗や羽釜などが出土した。空堀の底から土壙の残存頂部までは、比高約5mを測る。この東西土壙の北斜面は、約50度の傾斜がある。

〈北平坦面〉

当調査区の北端にある平坦面では、北西方向へのわずかな傾斜が観察できたが、明確な遺構は確認できず、現地表面から段丘疊層直上まで近現代の堆積で、旧表土も残っていなかった（同版四上）。

(4) 東調査区

当調査区では、土橋とされている形状が、いつどのように築かれたかなどを調査主眼とした。

〈空堀 SD01〉

空堀SD01は、他の調査区同様に深さ約3.5mを測る。空堀内の堆積からは、空堀構築時期や機能していた時期を示す遺物は出土しなかった。

〈土橋〉

東西空堀を掘り抜いた後、空堀の底から盛土して（第5図右調査区土橋面図第7～26層）、約3mの高さに構築している（同版五上）。構築土は、空堀堆積土と異なり、堅く締まっている。構築時期は、土橋構築土が近世以後の堆積と異なり、東西土壙・空堀構築と一連で築かれたと解せる。長岡京跡右京第681次調査2トレチでは、この土橋で空堀を渡り、東西土壙を南に抜けたところの正面で、井戸や根石を持つ門構造と思われる柱穴が検出されており、興味深い。

4 まとめ

当調査では、当所に残る土塁・空堀・土橋の構造や規模などを一部ではあるが明らかにすることが出来た。以下に、土塁・空堀・土橋に関する周辺部の調査成果との関連をまとめておきたい。

まず、土塁について比較検討する。当調査の南北土塁北端崖面の調査では、この土塁構築に2時期ある可能性を知り得た。その下層は、長岡京跡右京第681次調査1トレンチの東西土塁上層に類似する。上層は、長岡京跡右京第163次調査東西土塁構築土と類似する。また中央調査区南端の北東区画南辺土塁構築土は、長岡京跡右京第681次調査1トレンチの東西土塁下層の下位堆積部分に類似する。これらの過去の調査との比較から、長岡京跡右京第681次調査1トレンチ付近から当調査中央調査区付近、言い換えれば、北東区画南辺土塁南西部は構築時期が古く、長岡京跡右京第163次調査付近の北東区画南辺土塁東半部は新しい段階の構築である可能性がある。古い土塁構築期は、西辺の南北土塁下層構築期に相当し、西調査区検出の掘り込みSD02や長岡京跡右京第681次調査1トレンチから同631次調査1トレンチにかけて検出された空堀SD01と同時期である可能性がある。長岡京跡右京第733次調査で検出された南北土塁西堀の溝も同時期の可能性が考えられる。南北土塁に東西土塁が取り付くところ以前も、長岡京跡右京第631-681次調査1トレンチ空堀の方向に近いことから、古い構築である可能性がある。

次に空堀について比較検討する。北東区画南辺土塁の北辺に平行する空堀SD01は、深さ3mを超える。これに比して、土塁構築土上層以前の掘り込みSD02は、深さ約1.5mと浅い。東西空堀SD01が北東区画西辺土塁に突き当たり、南北土塁東堀に沿って北に折れ曲がっていると考えられるが、遺存地形では、この折れ曲がり以北が浅くなってしまい、掘り込みSD02に類似する規格であった可能性がある。西調査区で検出した掘り込みSD02は、平成14年度立会02007次調査検出溝につながるとすれば、南北土塁下層構築層との関係は明らかでないが、上層を築く以前に掘られた東西空堀である可能性が高い。本来この空堀が、現存する東西空堀と重なって東に延びていたと思われ、南北土塁上層構築時に南北土塁以東をさらに深く掘り下げ、北東区画南辺東部へも延長した可能性が考えられる。

今回の調査では、各遺存構造の規模や構築手法の一部が明らかにできたほか、当調査対象地に残る土塁と空堀の構築期が、2時期に分けられる可能性を指摘した。この2期が、神足城期と細川勝龍寺城期とに比定できるかどうか、今後の最も大きな課題と言えよう。

注1) 木下 良「西岡地方における城館・防衛集落」『京都社会史研究』法律文化社 1971年

2) 京都の文化遺産を守る懇親会「勝竜寺跡 京文遺だより」No.11 1984年3月20日

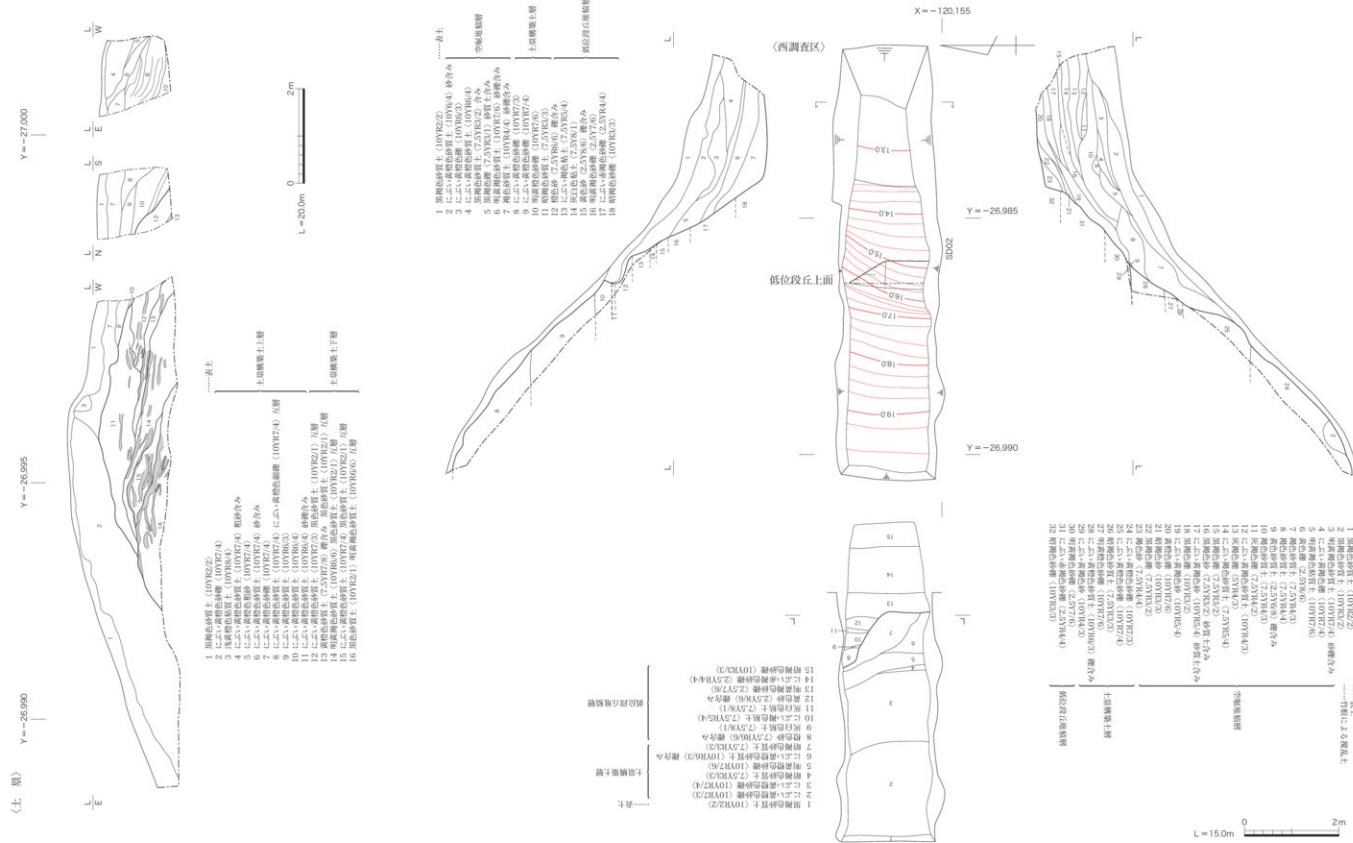
3) 小田桐 淳「平成14年度立会調査」『長岡京の地理学センター年報』平成14年版 2004年

4) 原 秀樹「長岡京跡右京第681次調査概要」『長岡京市報告書』第42冊 2001年

5) 岩崎 誠「長岡京跡右京第163次調査概要」『長岡京市報告書』第15・17冊 1985・1986年

6) 原 秀樹「長岡京跡右京第631次調査概要」『長岡京市報告書』第41冊 2000年

7) 木村泰厚「長岡京跡右京第733次調査概要」『長岡京市報告書』第45冊 2003年



第4图 北区西面南北土梁北崖面上剖图、西调查区平面图·土层图(1/80)

1 地面砂質土 (10YR22/1)
2 黄褐色砂質土 (10YR22/2)
3 棕褐色砂質土 (10YR11/3)
4 にじみ黄褐色砂質土 (10YR5/3)
5 にじみ黄褐色砂質土 (10YR5/2)
6 にじみ黄褐色砂質土 (7YR3/2)
7 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/4)
8 にじみ黄褐色砂質土 (10YR2/4)
9 にじみ黄褐色砂質土 (10YR2/3)
10 にじみ黄褐色砂質土 (7Z5Y3/4-5)
11 にじみ黄褐色砂質土 (7YR12/2-3)
12 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/3)
13 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/4)
14 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/5)
15 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/6)
16 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/7)
17 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/8)
18 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/9)
19 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/10)
20 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/11)
21 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/12)
22 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/13)
23 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/14)
24 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/15)
25 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/16)
26 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/17)
27 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/18)
28 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/19)
29 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/20)
30 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/21)
31 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/22)
32 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/23)
33 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/24)

- 1 黄褐色砂質土 (10YR2/2)
2 にじみ黄褐色砂質土 (7,5YR6/4)
3 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/1)
4 にじみ黄褐色砂質土 (10YR5/5)
5 にじみ黄褐色砂質土 (10YR7/4)
6 にじみ黄褐色砂質土 (10YR7/5)
7 にじみ黄褐色砂質土 (10YR7/6)
8 にじみ黄褐色砂質土 (10YR7/5)
9 黄褐色砂質土 (7,5YR4/3)
10 黄褐色砂質土 (7YR4/1)
11 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/4)
12 にじみ黄褐色砂質土 (10YR7/6)
13 にじみ黄褐色砂質土 (7,5YR5/2)
14 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/5)
15 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/6) 小石混じり
16 明黄色砂質土 (10YR7/6) 小石混じり
17 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/7)
18 にじみ黄褐色砂質土 (10YR7/5)
19 にじみ黄褐色砂質土 (10YR7/4) 混合み

1 にじみ黄褐色砂質土 (10YR2/2)
2 にじみ黄褐色砂質土 (10YR7/2)

3 黄褐色砂質土 (7,5YR4/2)

4 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/6)

5 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/7)

6 にじみ黄褐色砂質土 (7YR4/1)

7 黄褐色砂質土 (7YR4/2)

8 にじみ黄褐色砂質土 (10YR5/3)

9 黄褐色砂質土 (7,5YR4/3)

10 黄褐色砂質土 (7YR4/1)

11 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/4)

12 にじみ黄褐色砂質土 (10YR7/6)

13 にじみ黄褐色砂質土 (7,5YR5/2)

14 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/5)

15 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/6) 小石混じり

16 明黄色砂質土 (10YR7/6) 小石混じり

17 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/7)

18 にじみ黄褐色砂質土 (10YR7/5)

19 にじみ黄褐色砂質土 (10YR7/4) 混合み

- 20 黄褐色砂質土 (10YR7/2)
21 黄褐色砂質土 (7,5YR7/8) 混合み
22 黄褐色砂質土 (10YR6/2)
23 にじみ黄褐色砂質土 (10YR7/4)
24 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/3)
25 黄褐色砂質土 (10YR5/2) 小石含み
26 黄褐色砂質土 (10YR5/3) 小石含み
27 両端砂質土 (7,5YR4/2)
28 灰色砂質土 (7,5YR4/2)
29 にじみ黄褐色砂質土 (10YR5/3)
30 にじみ黄褐色砂質土 (10YR5/4)
31 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/4)
32 にじみ黄褐色砂質土 (7,5YR6/4)
33 にじみ黄褐色砂質土 (10YR5/3)
34 にじみ黄褐色砂質土 (10YR5/6) 砂混じり
35 明黄色砂質土 (10YR7/6)
36 黄褐色砂質土 (10YR7/8)
37 にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/8)

空堀堆積
空堀堆積
空堀堆積
堆積段丘
堆積

周囲の砂質土 (10YR2/2)
にじみ黄褐色砂質土 (10YR6/2)

(10YR6/1) (10YR6/3)

(10YR6/4) (10YR6/6)

(10YR6/7) (10YR6/9)

(10YR6/10) (10YR6/12)

(10YR6/13) (10YR6/15)

(10YR6/16) (10YR6/18)

.....表土

.....表土

.....表土

.....表土

.....表土

.....表土

.....表土

0

2m

L = 15.0m

第5図 中央調査区、東調査区平面図・土層図 (1/80)

第2章 井ノ内車塚古墳第6次調査概要 —長岡京跡右京第1068次調査(7ANGKT-7地区)－

1 はじめに

- 1 本報告は、2013年8月9日から10月2日まで、長岡京市井ノ内向井芝4において実施した井ノ内車塚古墳第6次調査(長岡京跡右京第1068次調査)に関するものである。
- 2 調査は、井ノ内車塚古墳の墳形や規模などを確認する目的で実施したもので、調査面積は63m²であった。
- 3 調査地は、長岡京跡右京二条四坊十五町にもあたりため、長岡京に関わる遺構、遺物の確認も合わせて行った。
- 4 発掘調査は、平成25年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施したもので、現地調査は原秀樹が担当し、山本卯雄が補佐した。
- 5 発掘調査にあたっては、土地所有者をはじめ、周辺地権者の方々や関係機関に種々のご理解とご協力を賜った。
- 6 本報告の編集と執筆は、山本が行った。

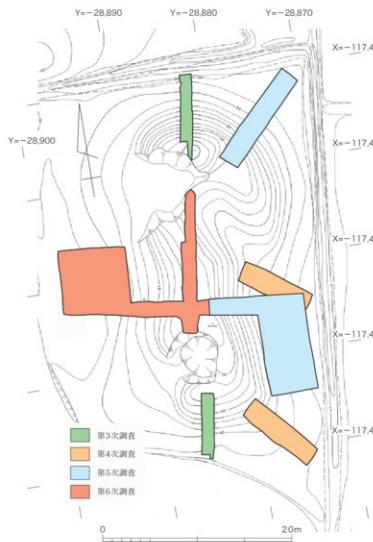


第6図 発掘調査位置図(1/5,000)

2 調査経過

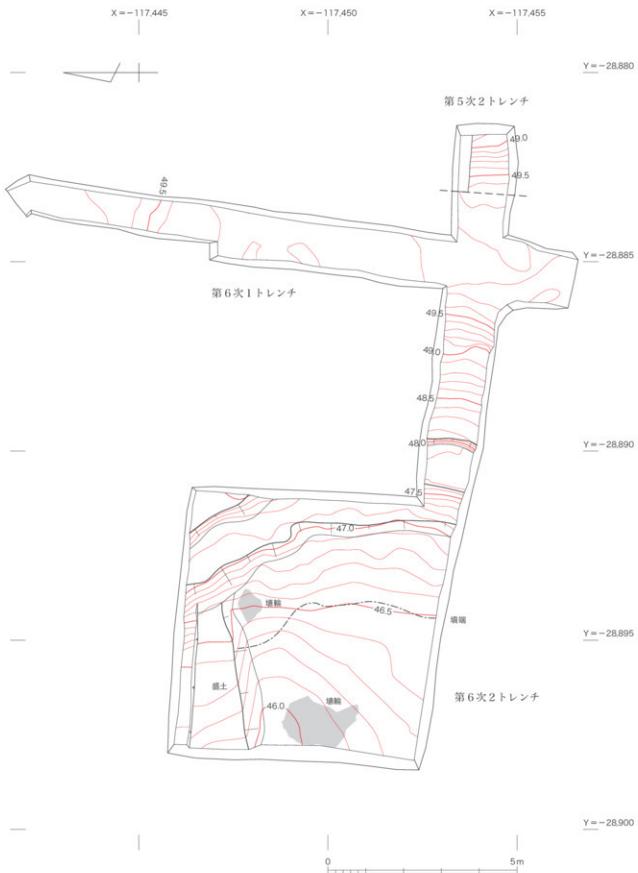
井ノ内車塚古墳は、長岡京市の北部地域にある京都府長岡京市井ノ内向井芝4に所在する前方部を南東に向けた前方後円墳である。古墳は、西から東に向かって傾斜する標高48m前後の低位段丘Ⅰ上に築造されており、付近には井ノ内稻荷塚古墳や芝1号墳などの首長墳をはじめ、井ノ内古墳群や芝古墳群などといった群集墳が分布している。さらに、古墳時代後期を中心とする堅穴建物や掘立柱建物など集落に関係する遺構が確認されている土里遺跡や井ノ内遺跡も付近に所在している。

井ノ内車塚古墳に関しては、江戸時代や明治年間に作られた絵図や地籍図、それに地誌などに「車塚」という名称が記されており、地元では古くから塚=古墳として認識されていたようである。古墳としての考古学的な認識は、1967（昭和42）年に京都府教育委員会が墳丘の測量調査（第1次調査⁽¹⁾）を行ったことが契機となり、墳形や規模など古墳の概要が測量図とともに報告書や京都府遺跡地図に掲載され、周知の遺跡として広く世間に認知されるようになった。それから四半



第7図 墳丘と調査区配置図 (1/400)

世紀を経過した1997（平成9）年に大阪大学文学部考古学研究室が改めて墳丘の測量調査（第2次調査⁽²⁾）を行い、さらに1999（平成11）年に長岡京市教育委員会が主体となり、財團法人長岡京市埋文化財センターが大阪大学大学院文学研究科考古学研究室の協力を得て実施した第3次調査⁽³⁾により初めて考古的なメスが入れられたのである。その後、2011（平成23）年からは古墳を後世に保存していくための基礎的な情報を得るための範囲確認調査として第4次調査、2012（平成24）年の第5次調査を実施し、墳丘の規模や形態を復元する上での貴重な情報が得られるとともに、埴輪をはじめ土師器、須恵器、韓式系土器などの遺



第8図 第6次調査平面図 (1/100)

物がまとまって出土するなどの成果があった。

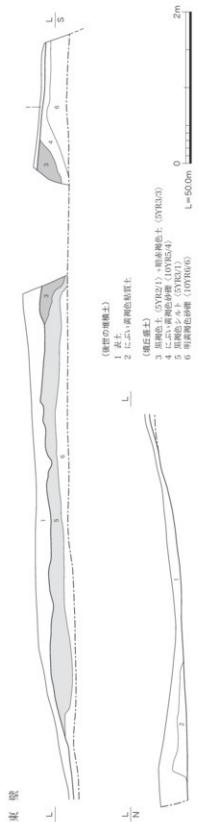
今回の第6次調査は、これまでの調査成果を踏まえ、引き続き基礎的な情報を得る目的で、墳頂部と西側くびれ部の2箇所に調査区を設定して行ったものである。調査にあたっては、まず8月9日より調査対象地に生い茂っていた孟宗竹や樹木を伐採し、それらを搬出することから開始した。そして、8月19日より重機で竹と樹木などの抜根作業を行った後、人力で掘り下げを行って調査を進めた。調査の結果、1トレンチでは墳頂部における盛土の構築状況を確認し、また2トレンチでは西側くびれ部とその裾部に樹立されたと考えられる埴輪片がまとまって出土した他、後円部に盛土で付設された造り出しの可能性がある高まりを検出するなど、予期せぬ大きな成果を得ることができた。そして、遺構の実測作業と写真撮影を行った後の9月30日から埋め戻しを行い、10月2日に現地での調査を終了した。

なお、調査期間中の8月20日に文化庁文化審議会文化財分科会の寺沢知子委員の視察を受け、種々の指導を受けた。また、9月20日には、土地所有者や近隣の文化財担当者を主体とした関係者説明会を開催した。

3 検出遺構

1トレンチ 後円部から前方部にかけての墳頂部に設定した調査区で、埋葬施設の痕跡や埴丘の盛土の堆積状況などの確認を目的とした。調査区は、長さ（南北）約15m、幅（東西）が1～1.5mの規模で、調査区心の国土座標値はX=-117,450、Y=-28,884である。

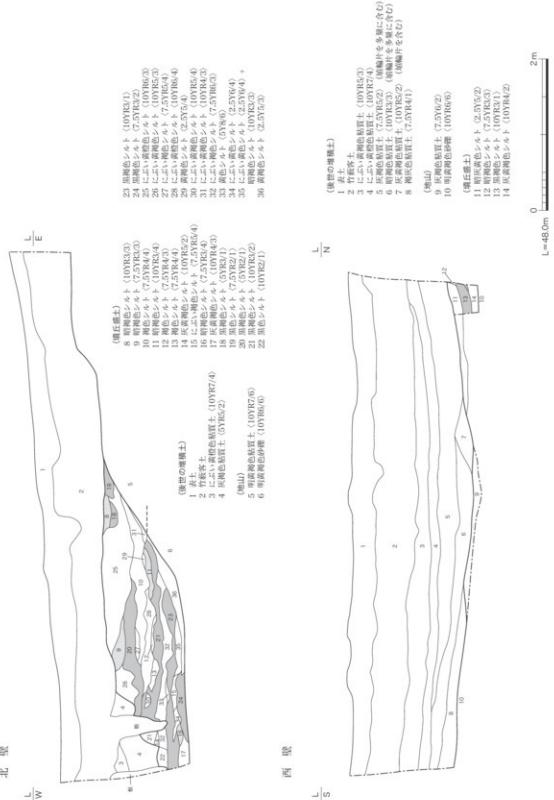
厚さ0.5～20cm程度の表土層を除去すると、竹藪の客土の堆積は認められず、すぐ埴丘の盛土面であることを見確認した。埴丘に使用された盛土は、黒褐色系のシルト層や黄褐色系の砂礫層で構成されており、細かい単位ではなく、比較的大きな単位で積み上げたものである。トレンチの範囲では、埋葬施設に関係すると見られる土質の相違を認めることはできず、出土した遺物も皆無であった。ただし、トレンチ付近の埴丘表面において須恵



第9図 1トレンチ上層図（1/50）



第10図 2トレンチ平面図 (1/50)



第11図 2トレント上層図(1/50)

器の杯蓋を1点採集している。

2トレンチ 墳丘西側のくびれ部を確認する目的で設定した調査区である。おおむね7m四方の正方形調査区と、その南東隅部から東に向かって幅2m、長さ約8mの細長い調査区を付加したもので、先端は1トレンチと直交して第5次調査の2トレンチに接続している。調査区心の国土地標値は、X=-117.450、Y=-28.894である。

まず、このトレンチの層序を西壁でみると、上から表土（第1層）、竹藪の客土（第2層）、にぶい黄褐色粘質土（第3層）、にぶい黄橙色粘質土（第4層）、灰褐色粘質土（第5層）、暗褐色粘質土（第6層）、灰褐色粘質土（第7層）、褐灰色粘質土（第8層）の順で堆積しており、その下が灰褐色粘質土（第9層）および明黄褐色砂礫（第10層）の地山面であった。にぶい黄褐色粘質土（第3層）は、墳丘の東側においても類似する土層が認められており、埴輪片とともに土師器や瓦器など中世の遺物を包含していたが、今回の調査では出土していない。第5～7層には、大量の埴輪片をはじめ、綠釉陶器や白磁など平安時代と考えられる土器片が混在した状態で出土している。

このトレンチでは、当初に予想したとおり墳丘西側のくびれ部を確認することができた。くびれ部は、地山を削り込んで形成されており、墳端での標高は46.5m前後で、墳丘東側の墳端高と大差はなかった。さらに、トレンチ北部の後円部において、盛土で構成される高まりを確認することができた。この高まりは、後円部から直交するよう西側に向かって延びており、全容は不明であるが、南北が1.8m以上、東西に3.8m以上、高さは1.05m程度の規模がある。盛土は、暗褐色系や黒褐色系、黃色系などのシルト層で構成され、それらの土層が厚さ10～20cm程度の小単位で交互に積み上げられていることを、トレンチ北辺を断ち割ることによって確認することができた。この盛土による構築物は、後円部に付設された造り出し、あるいは墓道などの施設

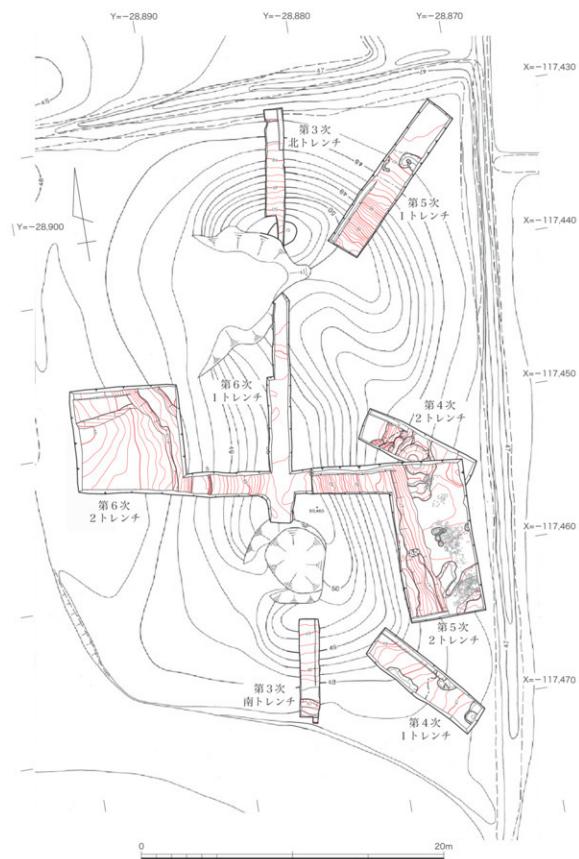
4 出土遺物

が考えられるが、翌年予定の調査を待つて判断したい。

今回の第6次調査では、埴輪、土師器、須恵器、綠釉陶器、白磁、陶器、瓦、それに陶棺など各時代、各種類の遺物が整理箱に22箱出土している。その大半を占めているのは、2トレンチから出土した埴輪類であり、他の遺物の出土量はそれほど多くない。遺物の整理が完了していないため、詳細は本報告で詳述したいが、ここでは主な遺物の概要を述べておく。

まず埴輪は、これまでに確認されている普通円筒、朝顔形円筒、石見型、家形の他に、蓋形、盾形、巫女形、馬形、犬形など多彩な形象埴輪が今回確認された。

普通円筒埴輪は、3条突縫4段構成に復元することができるもので、外面の調整は基本的にタテハケないしナナメハケを施し、底部調整が認められる。透孔は円形で、2段目と3段目に交互の位置に配している。焼成は、黒斑を有するものがないため、窯窓によって硬質に焼成されたものが主体であるが、軟質に焼成されたもの、完全に須恵質に焼成されたものも存在する。石見型埴輪は、形象部に円孔を複数穿っているが、文様はほとんど施されていない。円筒部の上端は、



第12図 墳丘と調査全体図 (1/250)

先細りして終わる通有の形態ではなく、粘土を逆ハ字形に形象部裏面に貼り付ける特徴が認められる。

形象埴輪は、いずれも全形をうかがい知れるものではなかった。巫女形埴輪は、小型品のようで、袈裟状衣を表現している。馬形埴輪は、馬具を装着した飾り馬で、尻懸や鎖などを表現している。犬形埴輪は、脚部、脚部、尻尾、耳などが確認できる。

須恵器には、杯蓋や甌などがあり、杯蓋は陶邑窯のTK10型式に比定できる。

縁軸陶器は、椀や皿などの器種があり、須恵質のものと軟質のものがある。白磁は底部の少片である。

陶棺は、表面採集されたもので、須恵質四注式陶棺の棺身の底部片である。側面には横方向に粗いハケメが施されており、底部外面には同心円文のタタキ痕をわずかにとどめる。須恵質に焼成されており、色調は暗灰色を呈している。

5 まとめ

今回の第6次調査の成果は多岐にわたるが、以下簡単にまとめると次のようになる。

- ①墳丘西側のくびれ部のおおよその位置を確認することができ、墳形を復元する上の貴重な定点が得られた。
- ②くびれ部に近接する後円部には、盛土で構築された高まりを付設していることが判明し、造り出しあるいは墓道が存在した可能性が濃厚になった。

③墳丘の裾部において大量の埴輪片が出土したこと、墳丘の東側のみならず西側においても埴輪を樹立していくことが明らかになった。埴輪には、これまで知られていなかった蓋形、馬形、犬形、巫女形など多彩な形象埴輪があり、これまで不明であった埴輪が破壊されて埋没した時期が平安時代である可能性を考えらるようになった。

注1) 堀主三郎・高橋美久二「向日丘陵地周辺分布遺跡調査概要」『京都府概報』 1968年

2) 都出比呂志編「古墳時代首長墓変動パターンの比較研究」 1999年

3) 清家章「井ノ内車塚古墳第3次調査概要」『長岡京市報告書』第41冊 2000年

4) 山本輝雄「井ノ内車塚古墳第4次調査概要」『長岡京市報告書』第61冊 2012年

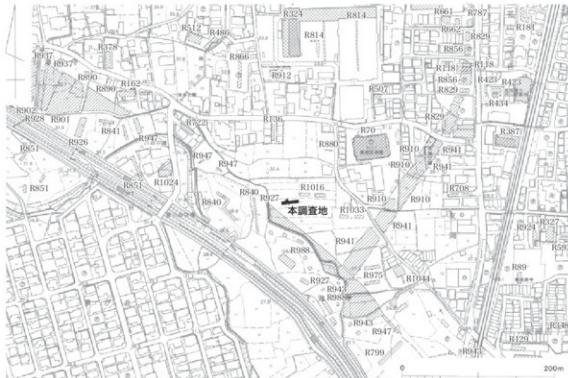
5) 山本輝雄「井ノ内車塚古墳第5次調査概要」『長岡京市報告書』第64冊 2013年

第3章 長岡京跡右京第1078次(7ANOOD - 14地区)調査概要

—長岡京跡右京八条三坊十六町、伊賀寺遺跡—

1 はじめに

- 1 本報告は、2013年12月9日から2014年1月25日まで、長岡京市下海印寺下内田13-1において実施した伊賀寺遺跡・長岡京跡に関する調査概要である。
- 2 当調査は、伊賀寺鰐文遺跡の範囲及び土地利用状況を掌握し、遺跡保護に資する資料を得るために実施した。調査面積は、約98m²であった。
- 3 調査地は、長岡京跡右京八条三坊十六町の推定地や、鰐文時代をはじめ古墳時代以後の伊賀寺遺跡にも重複しているため、これらに関わる範囲確認調査としての目的も兼ねていた。
- 4 発掘調査は、平成25年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会から委託を受けた公益財團法人長岡市埋蔵文化財センターが実施し、現地調査は同センター山本輝雄と長岡京市教育委員会教育部生涯学習課文化財係岩崎誠が担当した。
- 5 発掘調査に当たっては、土地所有者をはじめ、地元自治会、農家組合、近隣土地所有者や住民に深いご理解と種々のご協力をいただいた。
- 6 本報告は、岩崎が執筆し、編集は山本が行った。



第13図 発掘調査位置図 (1/5,000)

2 調査経過

この調査は、伊賀寺縄文時代集落遺跡の範囲確認と、当調査地点の土地利用状況を把握し、遺跡保存に必要なデータを得ることを目的としている。また、長岡京跡に関する遺構の有無や、古墳時代から奈良時代にかけての伊賀寺遺跡の様相を調査することも、重要な目的の一つである。

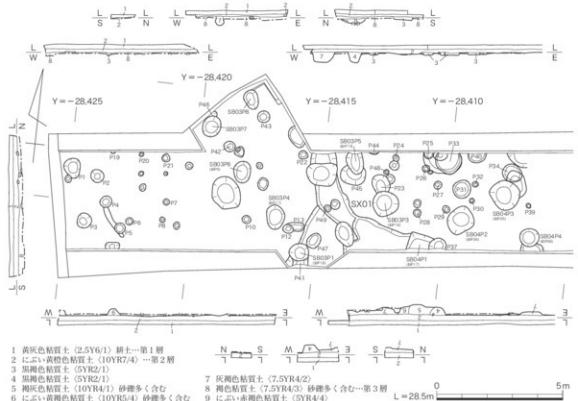
縄文時代の伊賀寺遺跡は、京都府第二外環状線（現在の京都縦貫自動車道）（図版一上）建設に伴う調査で、縄文時代の拠点的集落であることが明らかにされた。乙訓地域のみならず京都府下、また西日本でも非常に珍しい縄文時代中期の石圓い市のある住居跡や、後期の焼骨墓、玉造り工房などが明らかになり、注目されている。さらに、中期や後期の堅穴建物が10棟以上も椟出され、縄文ムラの様相が大まかに復元できるにいたった。

3 椟出遺構

今回の調査では、小穴などの遺構が多数椟出された（第14図、図版一二）。これらの遺構の埋土は、黒色、黒褐色、褐色に分けることができた。黒色土を埋土とする遺構からは、飛鳥時代や奈良時代の土器片が出土し、黒褐色の埋土を持つ遺構からは、縄文土器が出土し、土色の違いは、時期差と考えられる。これらの遺構群を、時代ごとに概観する。

＜飛鳥～奈良時代の遺構＞

一方が0.6～1mの方形または長方形の小穴などがある。これらの小穴群は、その配列から、



第14図 調査区椟出遺構図・土壙図 (1/150)

建物としてまとまるものがある。

掘立柱建物SB03（第15図、図版一三上）は、北西～南東方向に棟をもつ建物である。建物の規模は、梁行2間（約3.9m）、桁行3間（約6.3m）で復元できる。柱間は、梁行1間か約1.95m等間、桁行1件が約2.1m等間に配置されている。棟方向は、N=40°～Wを指す。北西隅の柱穴（SB03PT）から飛鳥時代須恵器杯Gが出土した。各柱穴の柱根は明らかにできなかった。掘形が、基本的に隅円形であるが、南東方向へ張り出した形状をなすものがであることから、解体時に柱を抜き取っているものと思われる。

掘立柱建物SB04（第16図、図版一三下）は、掘立柱建物SB03と同じ方向に棟をもつ同規模の建物と考えられる。梁行2間（3.9m）、桁行1間（約2.1m）を椟出した。梁行の柱間は、約1.95m等間である。

小穴P1は、一辺約0.7mの隅丸方形を呈する掘形で、深さ約0.15mを測る。土師器杯皿類の口縁部細片が出土した。奈良時代の所産と思われる。埋土は、掘立柱建物SB03・04の柱穴埋土1に類似する。

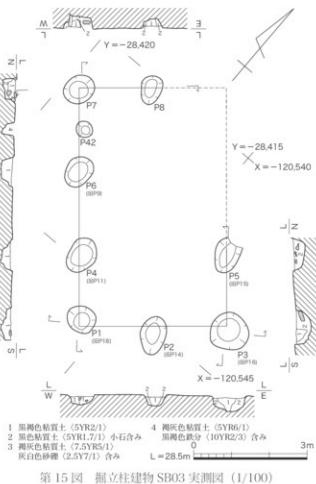
小穴P3（図版一四上）は、I辺約0.5mの隅円方形で、深さ約0.2mを測る。埋土に20cm大の礫を含む。椟出面直下から、奈良時代の須恵器杯Bが出土した。埋土は、出土遺物がほとんどない小穴群に類似する。

＜縄文時代後期の遺構＞

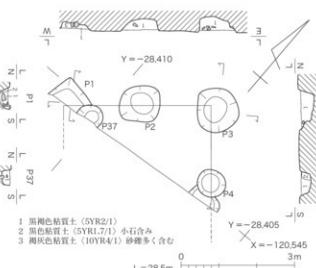
小穴状の遺構P23・P33・P45・P46や円形・楕円形の土坑SK02・06・07がある。

土坑SK02（第17図）は、長径約1.5m、短径約1.2mの楕円形を呈する。深さは約0.26mを測る。

土坑SK06は、長径約1.1m、短径



第15図 掘立柱建物SB03実測図 (1/100)



第16図 掘立柱建物SB04実測図 (1/100)

約0.7mの梢円形で、深さ約0.4mを測る。南西部は、掘立柱建物SB04P3に削られている。

土坑SK07は、長径約1.2m、短径約0.9mの梢円形で、近い梢円形を呈する。縄文後期の土器が出土した。

小穴状遺構P23は、直径約0.7m、深さ約0.4mを測る。

小穴状遺構P33は、直径約0.6m、深さ約0.4mを測る。

小穴状遺構P45（第18図）は、長径約1m、短径約0.7mの円形に近い梢円形を呈する。深さは、約0.5mを測る。

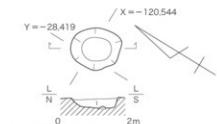
小穴状遺構P46は、直径約0.5mの円形になるものと思われるが、南半が掘立柱建物SB03P7に削られている。

深さは、約0.35mを測る。断面は、やや袋状をなす。

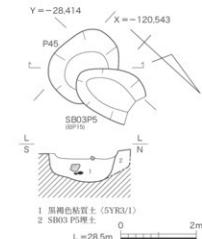
<縄文時代中期の遺構>

縄文時代中期後半の遺構には、調査区のほぼ中央で検出した浅い窪みSX01と、そこから北に延びる溝状遺構SD05がある（第19図、図版一五（1））。

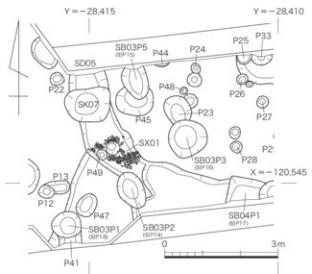
浅い窪みSX01は、調査区南辺から三角形に検出した遺構で、西辺約3m以上、北辺約4m以上の方形または長方形になる可能性がある遺構の一部である。北辺の東端は、



第17図 土坑SK02実測図(1/10)



第18図 小穴状遺構P45実測図(1/10)

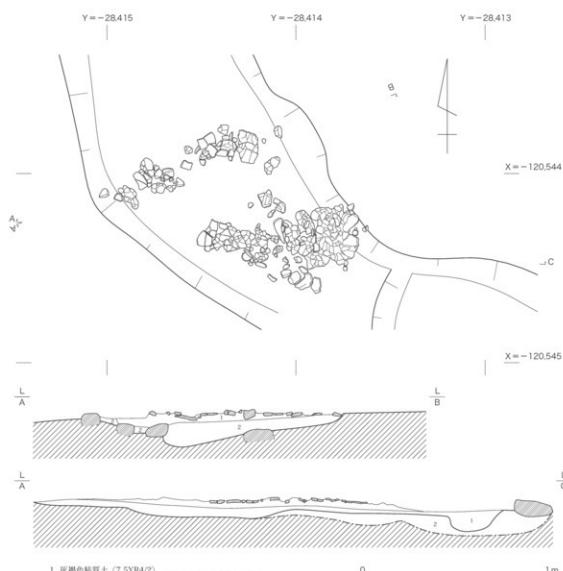


第19図 縄文時代中期の遺構平面図(1/100)

溝SD05は、幅1mを測り、浅い窪みSX01との重複部では深さ約0.1mと浅く、調査区北端では深さ約0.4mと深くなる。北に向かって深さが増すと思われるが、溝底傾斜個所に縄文後期の土坑SK07があり、この土坑より北と南が別の遺構である可能性も考えられる。

4 まとめ

今回の調査では、奈良時代～飛鳥時代の建物跡2棟や小穴群、縄文時代後期の小穴状の掘り込



第20図 浅い落ち込みSX01遺物出土状況(1/20)

みや土坑、縄文時代中期後葉の溝や浅い窪みなどを検出した。縄文時代中期後葉の土器がまとめて出土したことは特徴的と言える。

飛鳥～奈良時代の遺構群の中で、掘立柱建物が検出されたのは意義深い。周辺部の調査が進めば、飛鳥～奈良時代の伊賀寺遺跡の様相が具体的に浮かび上がってくると思われる。

縄文時代については、今回の調査で後期の小穴状遺構や土坑が見つかり、京都縦貫自動車道の調査で推定された土坑群の構築範囲がさらに広がることが明らかになった。一方で、中期後葉の浅い窪みや溝が見つかったことは、今まで推定されていた縄文時代中期の居住域の範囲を超えて、北の方向に広がることが確実となった。今回検出した浅い窪みは、竪穴建物の一部の可能性が考えられる。今後も当遺跡の調査を継続し、集落範囲や土地利用の在り方を具体的にとらえていく必要があろう。なお、出土遺物については、来年度に報告する。

付表-2 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしぶんかぎいちょうさほうこくしょ
書名	長岡市文化財調査報告書
図書名	
シリーズ名	長岡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第66冊
編著者名	岩崎 誠、山本 錠達
編集機関	公益財團法人 長岡市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡市奥海印寺東条10-1

図版

所取遺跡名	所在地	コ-ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡 神足遺跡 中世勝龍寺城跡 神足城跡	長岡京市 東神足 二十日内地内	26209	107	34°54'58"	139°32'17"	20130617 ~	48 m ²	範囲確認 調査
			93			20130813		
			84-1					
			82					
長岡京跡 井ノ内車塚古墳	長岡京市 井ノ内向井芝 4	26209	107	34°56'26"	135°41'01"	20130809 ~ 20131002	63 m ²	範囲確認 調査
			2					
長岡京跡 伊賀寺遺跡	長岡京市 下海印寺下内 田13-1	26209	107	34°54'46"	139°31'20"	20131209 ~ 20140125	98 m ²	範囲確認 調査
			96					

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡 (右京第1060次) 神足遺跡 中世勝龍寺城跡 神足城跡	都城 集落 城館	室町時代 桃山時代	土壙、空堀	土器、空瓶、土瓶の 規模と構築方法の一 端を掌握。	
長岡京跡 (右京第1068次) 井ノ内車塚古墳	都城 古墳	古墳時代	埴丘西側くびれ部、造 り出しない墓道	普通円筒、朝顔形円筒、 くびれ部に近接する 石見型、馬形、大形、巫 女形埴輪、土師器、須 恵器、綠釉陶器、白磁	
長岡京跡 (右京第1078次) 伊賀寺遺跡	都城 集落	縄文時代 飛鳥時代 奈良時代	小穴状遺構、土坑、浅 い堆み、掘立柱建物	北白川式一括土器が 出土。縄文時代中期 ~後期の集落のひろ がりを確認。	

座標度、経度の測点は調査区の中心で、国土座標の旧座標系を使用している。

中世勝龍寺城跡（長岡京跡右京第 1060 次）調査

図版一



(1) 調査区北辺調査前風景（北西から）



(2) 南北土塁北崖面調査区（北西から）

中世勝龍寺城跡（長岡京跡右京第 1060 次）調査

図版一



(1) 西・中央調査区全景（東から）

中世勝龍寺城跡（長岡京跡右京第 1060 次）調査

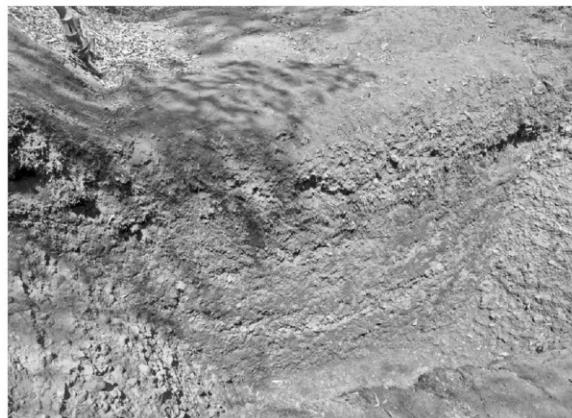
図版三



(1) 南北土塁構築以前の掘り込み SD02（東から）



(2) 西調査区東端北壁面の東西空堀堆積状況（南から）



(2) 中央調査区中央部東西空堀堆積土層（南東から）

中世勝龍寺城跡（長岡京跡右京第 1060 次）調査

図版四



(1) 中央調査区北端平坦面堆積層（東から）



(2) 中央調査区南端東西土壌構築土層（東から）

中世勝龍寺城跡（長岡京跡右京第 1060 次）調査

図版五



(1) 東調査区土橋構築土層（西から）



(2) 調査後の土壌保護対策風景（北東から）

井ノ内車塚古墳第6次（長岡京跡右京第1068次）調査

図版六



(1) 調査区全景（北から）



(2) 調査区全景（南から）

井ノ内車塚古墳第6次（長岡京跡右京第1068次）調査

図版七



(1) 1トレンチ全景（北から）



(2) 1トレンチ全景（南から）



(3) 1トレンチ盛土堆積状況（南西から）

井ノ内車塚古墳第6次（長岡京跡右京第1068次）調査

図版八



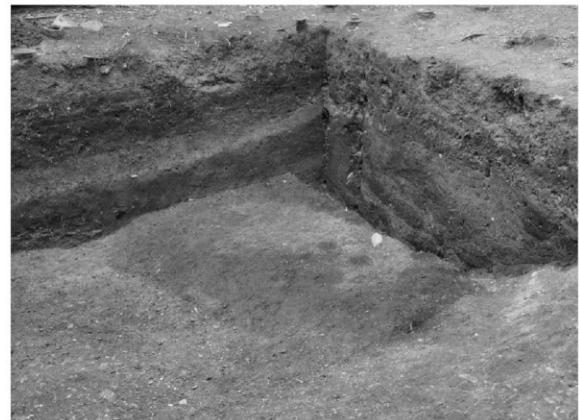
(1) 2トレンチ全景（南から）



(2) 2トレンチ全景（西から）

井ノ内車塚古墳第6次（長岡京跡右京第1068次）調査

図版九



(1) 造り出し又は墓道全景（南東から）



(2) 造り出し又は墓道全景（東から）



(3) 造り出し又は墓道全景（西から）

井ノ内車塚古墳第6次（長岡京跡右京第1068次）調査

図版一〇



(1) 墓出土状況（北西から）



(2) 墓出土状況（西から）

伊賀寺遺跡（長岡京跡右京第1078次）調査

図版一一



(1) 調査区遠景（北西から）



(2) 調査区遠景（南から）

伊賀寺遺跡（長岡京跡右京第 1078 次）調査

図版二



(1) 飛鳥～奈良時代の遺構群全景（西から）



(2) 飛鳥～奈良時代の遺構群（東から）

伊賀寺遺跡（長岡京跡右京第 1078 次）調査

図版三



(1) 掘立柱建物 SB03（南東から）



(2) 掘立柱建物 SB04（南西から）

伊賀寺遺跡（長岡京跡右京第 1078 次）調査

図版一四



(1) 小穴 P3 須恵器杯 B 出土状況（北から）



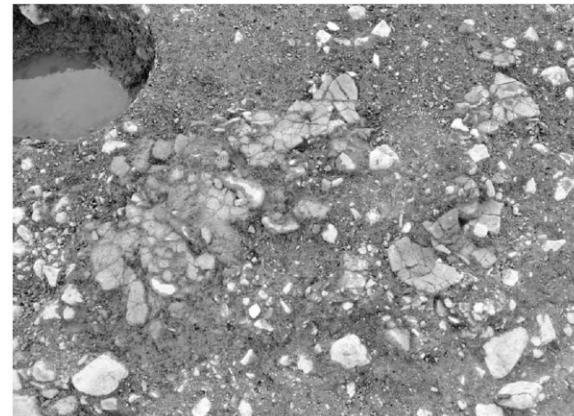
(2) 落ち込み SX01・溝 SD05 検出状況（南東から）

伊賀寺遺跡（長岡京跡右京第 1078 次）調査

図版一五



(1) 落ち込み SX01・溝 SD05 完掘状況（南西から）



(2) 落ち込み SX01 縄文土器出土状況（北東から）

長岡京市文化財調査報告書 第66冊

平成26（2014）年3月25日 発行

編 集 公益財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1
電話 075-955-3622 FAX 075-951-0427

発 行 長岡京市教育委員会
〒617-0851 京都府長岡京市開田一丁目1-1
電話 075-951-2121 (代)

印 刷 株式会社 ダイ
〒604-8241 京都市中京区三条通新町西入ル釜座町22
ストーケビル三條烏丸4F
電話 075-254-0646 FAX 075-254-0647